

大津皇子試論

—その辞世歌をめぐる—

北
島

徹

Summary

A STUDY OF ŌTSUNOMIKO

Toru Kitajima

In this paper, I examined the background of Ōtsunomiko's death based on his last poem.

First, focusing my attention on the expression "Kumogakuru", I looked for the same in "Nihon shoki" and "Manyō shū". Then, I came to the conclusion that Ōtsunomiko depicted the way of living of both Ōnamuchinokami and Tenmutennō.

Finally, I looked closely into the reason why Ōtsunomiko gave up the power of ruling the nation following the deed of Ōnamuchinokami and he dared to accept his destiny to be executed as a criminal, besides he put priority of peace of the nation before his own life like Tenmutennō.

大津皇子は天武天皇の第三皇子である。「日本書紀」「懷風藻」に記されているように、文武に優れ、聡明で人望の厚い人物であったようである。

その大津皇子が、朱鳥元年（六八六）九月九日の父天武帝崩御から一ヶ月も経ない十月二日、皇太子草壁皇子に対して謀反を企てたことが発覚し、翌三日に二十四歳の若さで死を賜っている。謀反が新羅の僧行心のすすめに乗ってのものであると「懷風藻」は伝えているが、それにしてもあまりに不用意で無謀な行動であり、聡明な大津の行った行動としては腑におちないものがある。

天武天皇の皇子のうち、最年長は高市皇子であったが、母の身分が低く、皇位を継承する可能性はなかったと言える。最も有力であったのは、時の皇太子草壁皇子である。草壁皇子は第二皇子であり、しかも皇后の皇子でもあった。したがって大津皇子はその草壁に次ぐ位置にあったことになる。しかし大津は人望の厚さという点で草壁を抜く存在であった。その上草壁はどうも病弱であったようであり、その点でも大津の方が優れていたと思われる。草壁皇子に関する「書紀」の記事を見ても、およそ活動的なものは見られない。現に草壁は、持統三年（六八九）四月十三日に二十八歳で薨じているのである。このような状況を見ると、天武天皇の後を嗣ぐ人物として、大津皇子が周囲から注目されていたことは容易に想像できるのである。

このことは、つまり大津皇子の立場が非常に危いものであったことを意味する。自分の子草壁皇子を皇位に即けたいと願う持統天皇にとって、大津皇子は最も警戒を要する人物であり、何としてでも排除しなければならぬ存在であったのである。^{注1}このような状況下で、大津皇子が軽々しく謀反の計画を練ったとは、やはり考え難い。大津皇子謀反は、本人の意志とは別のところ、持統天皇側の立てた筋書きに乗って運ばれたのではなかったか、とも考えられるのである。

大津皇子は本当に謀反を企てたのか、それとも謀反は持統天皇側の考えによって捏造されたものであったのか。本稿ではこの大津皇子の賜死の背景を、「万葉集」に残された辞世歌を見直すことによって探ってゆき、一つの仮説を立てることにしたい。

二

大津皇子、死を被りし時に、
警余の池の堤にして涙を流して作
らす歌一首

ももづたふ警余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

（三一四一六）

従来この歌について、大津自身の作であると見るものと、後人の仮託であると考えるものとの、その説くところが分かれている。後人の仮託であると考える鍵は、結句の「雲隠る」にある。「雲隠る」は『時代別国語大辞典上代篇』に「死又という語を敬避した表現」とある。つまり第三者が貴人の死を表現するのに用いるべき語であるということである。

たしかに「雲隠る」は今の天津皇子辞世歌を除き、すべて第三者がある人物の死を悼んで詠んだ歌にしか用いられていない。その点に注目すると、この天津辞世歌も皇子自身の詠んだものではなく、後人の仮託であると考えられる。^{注2}しかし、「万葉集」に載せられている挽歌のほとんどは第三者が詠んだものであって、天津皇子のように死を前にして自ら詠んだというようなものは、ほんのわずかしは見られないのである。^{注3}そのわずかな自作挽歌に「雲隠る」が見られないからといって、「雲隠る」を第三者にしか用いられない敬避表現であると決めてしまうことは穏やかでない。自敬表現であることれば問題はないのであるから、この歌は天津皇子自身の作であると考えてよいであろう。

右の歌を天津自身の作であるとする、ここで、ではなぜ皇子は自分の死を「雲隠る」と表現したのか、ということが疑問となってくる。

死を「雲隠る」と表現したもの、あるいは類似の表現をとっているものは、天津皇子辞世歌以外、次の三首が「万葉集」に見られる。

① 大君は神にしませば天雲の五百重の下に隠りたまひぬ

(二二〇五)

② 大君の命恐み大殯の時にはあらねど雲隠ります

(三二四四一)

③ 留めえぬ命にしあればしきたへの家ゆは出でて雲隠りにき

(三一四六一)

①は文武三年(六九九)弓削皇子が薨じた時に置始東人が作ったもの。

②は神龜六年(七二九)長屋王の賜死の後に倉橋部女王の作ったもの。

③は天平七年(七三五)尼理願の死去を悲嘆して坂上郎女が作ったものである。今、天津皇子挽歌の「雲隠る」を考えるにあたって、最も参考

とすべきは、作歌年次の一番近い①の弓削皇子挽歌であろう。この歌には「天雲の五百重の下に隠りたまひぬ」とあるが、これも「雲隠る」と同じ意味のもので、「雲隠る」をさらに具体的に述べたものであると思われる。ところでこの一首を見ると、上句に「大君は神にしませば」と表現されていることによって、死んで雲に隠れたのは、弓削皇子が「神」であったためであることがわかる。とすると、天津皇子挽歌の場合「神にしませば」という表現はないものの、「雲隠る」と詠むことによって、ある意味での「神」たる自分を示そうとしたとも考えられる。大津が自らを「神」であると促えていたとすると、それは一体どのような神であったのであろうか。

この問題を考えるにあたって、万葉時代の神観念といったものについて検討する必要はないであろう。今は雲に隠れゆく神に焦点を絞っているのである。したがってここでは雲、それも死後の行く先に存在する雲に注目することで事は足りると思われる。

そこで上代の文献によって、右のような「雲」を求めてゆくと、まず「万葉集」巻二に載せられた次の歌に行きあたる。柿本人麻呂の詠んだ草壁皇子の殯宮挽歌である。

天地の 初めの時の ひさかたの 天の河原に 八百万 千万神の
神集ひ 集ひいまして 神はかり はかりし時に 天照らす 日女
の命 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り
合ひの極み 知らしめず 神の命と 天雲の 八重かき分けて 神
下し いませまつりし 高照らす 日の皇子は 飛ぶ鳥の 清御原
の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます国と 天の原

石門を開き 神上り 上りいましぬ—— (二一—一六七)

前半部分だけを引用したが、この部分は次のように読み取ることができる。

天照らす日女の命(天照大神)が天を支配し、それによって葦原の瑞穂の国(地上の国)を治める神の命として日の皇子(天武天皇)を、天雲の八重かき分けて降らせた。さらにその天武天皇は、浄御原で世を治めた後、この国は代々の天皇が治める国であるとして、天の原の岩戸を開いて天に登った。

つまり天武天皇は天雲の彼方から降って来、そして天の岩戸を開いて天に登ったというのである。これは、地上に生まれ出る前の世界と、死後に行く世界と同じであったことを示している。

このことは「日本書紀」の次の記事を参考にするによくわかる。神代紀下の天孫降臨の条に、次のように記されている。

皇孫、乃ち天磐座を離ち、且天八重雲を排分けて、稜威の道別に道別きて、日向の襲の高千穂峯に天降ります。^{注4}

先の歌の「天雲の八重かき分けて」が、「書紀」の「天八重雲を排分けて」と同じものであることは、一目でわかるところである。そして歌の「天の原石門を開き」が、「天磐座を離ち」の逆をゆく動きであると知ることができる。すなわち今の挽歌で表現されている降ってくる前の世界と、登ってゆく先の世界とは同一の場所であり、そこは天孫の存在する天上世界であるということである。

さて、以上によって天武天皇は、崩御後、雲の彼方の天上に神として登って行ったと解することができる。とすると、大津皇子の場合も同じで

あったのではないであろうか。今の歌は、前述の通り草壁皇子の殯宮で人麻呂が詠んだ挽歌であるので、大津皇子が辞世歌を詠んだ時より、三年程後に作られたものである。したがって大津皇子は、直接この歌の影響を受けてはいない。しかし、草壁皇子挽歌の背景にあった天孫降臨の神話が、大津皇子の辞世歌の背景としてもあったことは充分に考えられる。「日本書紀」は養老四年(七二〇)に成立した書である。大津皇子はもちろんのこと、人麻呂もこれを読むことはできない。が、草壁皇子挽歌の描写と、「書紀」の記述との類似を見ると、明らかにこの天孫降臨の神話が、この当時に知られているものであったことがわかる。大津が詠み込んだ「雲」は、天上世界と地上世界とを隔てる雲であったと考えることができる。そしてさらに、「雲隠る」と詠むことによって「神」たる自分を示そうとした大津にとって、その「神」とは、天武天皇の場合と同質のもの、すなわち地上の国の安泰を願いつつ天上へと登ってゆく「神」であったと考えてよいのではないだろうか。

三

前項で見た「書紀」の天孫降臨の条を見ると、先にとりあげた部分とは別に、興味ある記事が見られる。

二一の神(経津主神、武甕槌神)、是に、出雲国の五十田狭の小汀に降到りて、則ち十握剣を抜きて、倒に地に植てて、其の鋒端に踞て、大己貴神に問ひて曰はく、「高皇産靈尊、皇孫を降しまつりて、此の地に君臨はむとす。故、先づ我一の神を遣して、駟除ひ平定めしむ。

汝が意何如。避りまつらむや不や」とのたまふ。時に、大己貴神對へて曰さく、「当に我が子に問ひて、然して後に報さむ」とまうす。

是の時に、其の子事代主神、遊行きて出雲国の三種の碕に在り。釣

魚するを以て樂とす。或いは曰はく、遊鳥するを樂とすといふ。故、

熊野の諸手船を以て、使者稻背脛を載せて遣りつ。而して高皇産靈の勅を事代主神に致し、且は報さむ辞を問ふ。時に事代主神、使者に謂りて曰はく、「今天神、此の借問ひたまふ勅有り。我が父、避り

奉るべし。吾亦、違ひまつらじ」といふ。因りて海中に、八重蒼柴籬を造りて、船柂を踏みて避りぬ。使者、既に還りて報命す。故、

大己貴神、則ち其の子の辞を以て、二の神に白して曰はく、「我が怙めし子だにも、既に避りまつりぬ。故、吾亦避るべし。如し吾防禦かましければ、国内の諸神、必ず当に同く禦きてむ。今我避り奉らば、誰か復敢へて順はぬ者有らむ」とまうしたまふ。乃ち国平けし

時に杖けりし広矛を以て、二の神に授りて曰はく、「吾此の矛を以て、卒に功治せること有り。天孫、若し此の矛を用て国を治らば、

必ず平安くましましなむ。今我当に百足らず八十隈に、隠去れなむ」とのたまふ。言訖りて遂に隠りましぬ。是に、二の神、諸の順

はぬ鬼神等を誅ひて、果に復命す。

右は、天孫降臨に先立って大國主が国譲りをする場面である。この中の大己貴神の最後の言葉に注目したい。それは「今我当に百足らず八十隈に、隠去れなむ」である。この言葉を見ると、そこには大津皇子辞世

歌との類似性が認められよう。大己貴神の「今」と大津皇子の「今日」、

「百足らず」と「ももつたふ」、そして「八十隈に、隠去れなむ」と「雲

隠りなむ」である。この表現上の類似性を見る時、大津皇子が自らを大己貴神に重ね合わせることも考えていたのではないか、と思えてくるのである。

今の「書紀」の記事を見ると、天孫降臨の前に、まず二の神が大己貴

神のもとを訪れ、国を譲るよう申し入れているが、この時大己貴神はその子事代主神に相談をもちかけている。そしてその承諾を得た上で国譲

りを決意する。それは「もしも自分が抵抗すれば、國中の諸神も戦うだろう。しかし自分が身を引けば、皆も従うだろう」と、戦いによる多くの流血を避ける道を選んだための国譲りであった。こうして大己貴神は

「今我当に百足らず八十隈に、隠去れなむ」と、最後の言葉を告げて姿を消してゆくのである。「八十隈」とは幽界の意であろうから、この世から去ったということになる。以後「書紀」にはまったく姿を現していないのである。

さて、以上の大己貴神の国譲りの様子を見ると、そこには大津皇子の置かれていた状況、あるいはその行動と類似する点が見出される。まず、

どちらも国家統治にかかわる問題が身に降りかかっているということである。そして、ともにその国家統治の道からはずれてゆく。しかも結果的に言って、その時多くの流血が避けられた、という点である。大津皇子謀反事件で死んだ人物は、当の大津と、妃の山辺皇女との二人だけであつたのである。また、大津皇子が伊勢に居る姉、大伯皇女のもとへ出かけたことも、最も近い肉親に相談をもちかけたを見ると、これも大己貴神がその子に尋ねたことと類似していると言えるであろう。

大津皇子謀反事件に関して、姉のもとを訪ねた行動は、「古事記」に記

される倭建命とその伯母倭姫命との関係に類似する、といったことがよく問題にされる。^{注5}しかし私は、それとは別に、この大己貴神の姿との類似性の大きさを問題にしたいのである。この類似性を重視すると、大津皇子は辞世歌に大己貴神の姿を込めようとしたと考えられるのである。

そう考えるとどうなるのか。大津の死は、自分が立つことによって当然起こると予想される戦い、流血を、大己貴神と同様に避けようとした、ということになるのではないだろうか。大津の脳裏には、父天武天皇と、天武の兄天智天皇の後を嗣いだ大友皇子との間に起こった壬申の乱の惨劇が、色濃く焼きついていたはずである。その時の痛ましい状況を知っているが故に、自分が身を引くことによって流血が避けられるならば、と考えたのではなかっただろうか。大津皇子について、「書紀」は「及長弁有才覚」（持統称制前紀）と記し、「懐風藻」は「降節礼士」と述べているが、そう評される大津であったからこそ、右のように思い慮って死を迎えたものと考えるのである。

以上のように考えると、大津皇子は実際に謀反を起こそうとしたのではなかったことになる。そしてその死は、持統天皇側の謀略に乗せられたためのものでもなかった、ということになる。では一体大津皇子はどのようにして賜死に至ったのであろうか。

四

大津皇子の謀反に関して、「日本書紀」は次のように伝えている。

朱鳥元年九月二十四日。「南庭に殯す。即ち発哀る。是の時に当り

て、大津皇子、皇太子を謀反^{かたが}けむとす。」（天武紀）

同年十月二日。「皇子大津、謀反^{あらは}けむとして発覚^{あらは}れぬ。皇子大津を逮捕めて、并て皇子大津が為に誣誤^{あやま}られたる直広肆八口朝臣音檀・山下壹伎連博徳と、大舍人中臣朝臣麻呂・巨勢朝臣多益須・新羅沙門行心、及び帳内礪杵道作等、三十余人を捕む。」（持統称制前紀）
同三日。「皇子大津を詔語田の舎に賜死む。時に年二十四なり。妃皇女山辺、髪を被して徒跣^{はだか}にして、奔り赴きて殉^{なげ}ぬ。見る者皆歎^{なげ}く。」（持統称制前紀）

同二十九日。「詔して曰はく、『皇子大津、謀反^{あらは}けむとす。誣誤^{あやま}かれたる吏民・帳内は已むこと得ず。今皇子大津、已に滅びぬ。従者、当に皇子大津に坐^がせらば、皆赦せ。但し礪杵道作は伊豆に流せ』とのたまふ。又詔して曰はく、『新羅沙門行心、皇子大津謀反^{あらは}けむとするに与せれども、朕加法するに忍びず。飛驒国の伽藍に徒せ』とのたまふ。」（持統称制前紀）

大津の謀反が発覚したのは十月二日であった。しかし既にその八日前、謀反を企てていたことが記されている。この記事は一体何を示しているのだろうか。この点について、吉田義孝氏は次のように述べておられる。

大津とその少数一派は、殯宮という余人では到底クーデタなど予想しかねる森厳な儀礼の場で、しかもその最初の儀式の執行される機会をつかんで、必ずそこに参列するにちがいない草壁の虚を衝き、所期の目的を果そうとしたのではなかったか。この挙に連なつた者は、持統紀によると三十数名に及ぶけれども、肝心の皇子はもとよ

りのこと、これらの人々が、具体的にどのような行動をとったか、全く触れていない。それは、書紀の編者の立場から、その詳述を避けたいというよりも、むしろ、諸皇子・王臣のいならぶ宮廷儀礼の場で敢行されようとしたこの「謀反」が、事前に皇子河嶋の密告にあつて、嚴戒体制の中で未然にふせがれる措置がとられたため、手も足も出せないまま、あえなく失敗に帰したところに根ざしていると思ふ。^注

九月二十四日の条に記されている「謀反」は、河嶋皇子の密告（「懷風藻」による。後述。）によって未然に防がれたものを示す、と言われるのである。しかし氏の考えられるところによると、謀反発覚は九月二十四日以前であったことになる。ところが「書紀」は、十月二日に発覚したと記している。これを素直に読めば、やはり十月二日の方に、謀反発覚の根拠となる何事かが起こったと考えざるを得ない。私はその根拠こそ、河嶋の密告ではなかったか、と考えている。後に詳しく述べるが、河嶋の告発には、それ相応の効力があるものであったと思われるのである。

ともあれ、九月二十四日以前には発覚していなかったのだとすると、この日の「謀反」は、十月二日の発覚、逮捕後の取り調べによって明らかにされたものと考え以外にない。逮捕された者の中に、新羅僧行心が居る。この行心が、九月二十四日に謀反を企てた、と白状したのではないだろうか。

「懷風藻」の大津皇子伝には、行心との接触のことが記されている。

時に新羅僧行心といふもの有り、天文ト筮を解る。皇子に詔けて曰はく、「太子の骨法、是れ人臣の相にあらず、此れを以ちて久しく下

位に在らば、恐るらくは身を全くせざらむ」といふ。因りて逆謀を進む。此の註誤に迷ひ、遂に不軌を凶らす。嗚呼惜しき哉。彼の良才を蓋みて、忠考を以ちて身を保たず、此の奸豎に近づきて、卒に戮辱を以ちて自ら終ふ。^{注7}

ここにあるように、大津皇子は、行心のすすめに乗って謀反を企てたことになっている。これが九月二十四日のことであつた、と行心は述べたのではないだろうか。そう考えると、「書紀」の記述も一応辻褄が合うのである。

ところで、この行心の接近によって、大津皇子は、自分の身に危険が迫っていると悟つたことであろう。この行心が、事件後飛驒の寺に移されるだけで、処罰らしい処罰を受けていないところを見ると、持統天皇側からのさしがねであつたことは充分に考えられる。つまり、有間皇子事件における、蘇我赤兄の役割を、行心が演じたのではないかということである。聡明な大津がそのことに気がつかぬはずはない。おそらく大津は、行心のすすめを拒否したであろう。しかし、そのまま何の行動もとらなければ、やがて捕えられ処刑されることは疑いない。その上有間皇子事件の時のように、大津皇子周辺に存在する親しい者達も、連座していたということで刑を受ける可能性がある。何とかしなければならぬ状態に、大津は追い込まれたことであろう。そんな時、大津は胸の内すべてを語ることでできる人物のもとを訪ねたのではないだろうか。それが天智天皇の第二皇子、河嶋皇子である。

「懷風藻」の河嶋皇子伝は、次のように記されている。

皇子は、淡海帝の第二子なり。志懷温裕、局量弘雅。始め大津皇子

と、莫逆の契を為しつ。津の逆を謀るに及びて、島則ち変を告ぐ。

朝廷其の忠正を嘉みすれど、朋友其の才情を薄みす。議する者未だ厚薄を詳らかにせず。然すがに余以為へらく、私好を忘れて公に奉ずることは、忠臣の雅事、君親に背きて交を厚くすることは、背徳の流ぞと。但し未だ争友の益を尽くさずして、其の塗炭に陥ることは、余も亦疑ふ。位浄大參に終ふ。時に年三十五。

大津は河嶋より六歳年下であったが、幼時より天智帝に愛されたと伝えられているし(持統称制前紀)、詩文の上でもともに優れた力量を持っていたわけであるので、二人が「莫逆之契」を結んでいたというのは事実であろう。その河嶋が、大津の謀反を密告したというのである。朋友が「薄其才情」と非難しているところを見ると、その密告もまた本当のことであったと思われる。この時、大津と河嶋との間に一体何があったのであろうか。

大津皇子に最も近い人物が河嶋皇子であったことは、周知のことであった。したがって、大津の謀反がたとえ持統天皇側の捏造であったとしても、皇子が捕えられれば、連座した者としてまっ先に疑われるのは河嶋皇子であったはずである。その嫌疑から逃れるには、密告という手段しかなかったというのも、それはそれとして認められる。しかし「懷風藻」に「志懷溫裕、局量弘雅」と記されるような性格の持ち主のといった行動としては、どうも納得のゆかないものがある。「懷風藻」の編者ならずとも、疑問が残るのである。私の恩師である故本位田重美先生は、「高市皇子試論」の中で、

河嶋と大津との深交は周知の事実であった。これはすなわち河嶋皇

子が告発したのなら、おそらく人は誰もこれを真実として疑わないであろう、ということである。このような計算の下で、河嶋皇子に告発者の役割が与えられたのであろうと思われる。^{注8}

と述べられ、この河嶋皇子も、持統天皇の謀略によって誦らされた人形であったと考えられた。そう考えると、大津皇子の謀反は、賜死に至るまですべて持統天皇の書いた筋書き通りに事が運ばれたということで、一応の筋は通ることになる。しかし私は、河嶋皇子の告発は持統天皇の筋書きにはなかったものと考えている。逆に、それは大津と河嶋二人だけの間で決められたものではなかったか、と思うのである。

僧行心の接近によって、持統天皇側の謀略の糸がめぐらされ始めていることを悟った大津皇子は、死から逃がられぬことを知りながら、なお犠牲者を最少限にくい止めるために事を急がねばならなかった。自分の方から、一人密かに謀反を練っている段階であることを明らかにすれば、あるいは自分一人の死で済むかもしれない。それには、そのことを誰もが信じる人物の告発が必要である。「莫逆之契」を結んでいる河嶋皇子こそ、その最適任者であつたらう。河嶋の告発とあれば、持統天皇としても無視するわけにはいかなかったはずである。むしろその寝返りを歓迎したに違いない。こうして大津皇子は、妃以外の誰をも死へと巻き込むこともなく死んでゆくことができたのではなかっただろうか。

ところで前項において、大津は自らを大己貴神に重ね合わせて辞世歌を詠んだのではなかったか、と述べた。大津にそれを可能ならしめるためには、大津が国譲り神話を知っている必要がある。しかも大己貴神の最後の言葉をも、正確に知っていなければならない。その辺の事情は、

今となつては知る術もないが、ここに一つの可能性として、大津はこの話を河嶋から聞かされたのではないか、ということが考えられる。

天武紀十三年三月の条に、天武帝が、河嶋皇子・忍壁皇子以下の者に「帝紀及び上古の諸事を記し定めしめ」たと記してある。「日本書紀」編纂の開始をさすと言われているものである。^{注9}とすると、「書紀」の完成を待たずとも、因譲り神話について河嶋はかなり詳しく知っていた可能性があるがある。大津皇子は、その河嶋皇子から大己貴神のことを知らされたのではないであろうか。

ともあれ以上のようにして、大津皇子は親友の密告という手段によって、大己貴神のごとく流血を避ける形で世を去ることができたものと考へるのである。

五

ここに至って、一つ素朴な疑問が生じてくる。大津皇子が一人世を去るには、文字通り自害するという方法もあったはずである。どうしてこちらを選ばなかったのであろうか。蛇足ながら、ここでこの疑問に答へる形で、一応の考えを述べておくことにする。

行心の接近により、到底死はまぬがれられぬものと悟った大津は、一人この世から去ることを決意する。それならば、何も河嶋皇子に朋友の非難を浴びるような密告までさせて処刑を待つなどということをしせず、行心が接触してきた後、いさぎよく自害して果ててもよかつたはずである。「懐風藻」に「及_レ壯愛_レ武。多力而能撃_レ劍。性頗放蕩。不_レ拘_レ法度_レ」

と記されるように、豪胆な面を持つ男としては、その方がふさわしいようにも思える。大津皇子も一度は自殺という手段を考えただのではないだろうか。しかし結局大津は処刑される方を選んだのである。思うにこの大津の選択は、過去の同様の事件を考慮してのものであったのではないだろうか。

大津皇子謀反事件を遡ること三十七年、謀反の疑いをかけられて一人の人物が自害している。時の右大臣蘇我倉山田石川麻呂である。この事件は、麻呂の異母弟蘇我臣日向が、皇太子中大兄皇子に讒言したことによって起こったものである。麻呂は身の潔白が証明される前に、自経して果てた。時に大化五年（六四九）三月二十五日のことであつた。その時のことを「書紀」は次のように記している。

「今我身刺^{むぎ}（日向）に譖ぢられて、横に誅されむことを恐る。聊に望はくは、黄泉にも尚忠しきことを懐きて返らむ。寺に来つる所以は、終の時を易からしめむとなり」といふ。言ひ畢りて、仏殿の戸を開きて、仰ぎて誓を發てて曰はく「願はくは我、生生世世に、君王を怨みじ」といふ。誓ひ訖りて、自ら経きて死せぬ。妻子の死ぬるに殉_レぶ者八。

続けて翌二十六日には、

山田大臣の妻子及び隨身者、自ら経きて死する者衆し。

とあり、さらに三十日の条には、

戮_レさるる者——中略——凡て十四人。絞らるる者九人。流さるる者十五人。

と、麻呂以外に、自経・斬刑・絞刑合わせて三十人以上の者が死に、十

五人が流されるという事態にまで至ったことが伝えられている。この後すぐに麻呂の無罪が証明され、皇太子中大兄も「始し大臣の心の猶し貞しく淨きことを知りて、追ひて悔い恥づることを生じて、哀しび歎くと休み難し」と「書紀」に記されるように、後悔するに至っているだけに、この事件は余計に哀れを誘う話として、後々まで語り継がれたであろう。大津皇子誕生以前のこととはいえ、この麻呂の謀反事件について、大津は知っていたと考えてよいであろう。^{注10}

ところで大津皇子の最大の関心事は、いかにして多くの流血を避けるか、というところにあった。とすると、今の麻呂の事件を聞き知っていたなら、当然自殺という手段はとれないはずである。自害したなら、麻呂同様、大津皇子周辺の者達にも処罰が及ぶだけでなく、殉死する者まで出る可能性がある。これでは一人で世を去ってゆくことなどできない、と考えたのではないだろうか。さらに、殉死しなかったとしても、その者達は大津を信奉しているだけに、不満分子として後に遺るようになるであろう。それではたとえ大津一人が世を去り得たとしても、国家安泰は望めないのである。遺してゆく者達のこと、大津にとって大きな問題であったはずである。大津を支持する一派が、大津の死後反体制側に立って団結するようなことにもなれば、これは国家の分裂をも招きかねない一大事である。大津はそれをも避けねばならないと考えたことであろう。

そのために大津に残された道はただ一つ、一人密かに謀反を練っている段階であることがわかるように河嶋に密告させ、罪人であることを周囲に認めさせた上で一人処刑されることであった。

朱鳥元年十月三日、大津皇子は以上のような経過をたどって死に臨んだ。この世を去る姿は多くの流血を防いだ大己貴神として、そして去った後は国家の安泰を願う天に登って行った天武天皇の如き神としての自分を見つめつつ、その思いを辞世歌に託したのではなかっただろうか。ただ、辞世歌にそんな皇子の思いが込められていることを、河嶋皇子以外幾人の者が知っていただろうか。

注

1 大津の置かれていた政治的・個人的立場が、いかに不安定なものであったかについては、既に詳しく論じられているところである。北山茂夫『日本古代政治史の研究』、直木孝次郎『持統天皇』、吉永登「大津皇子とその政治的背景」(『万葉 文学と歴史のあいだ』所収)、神堀忍「大伯皇女と大津皇子」(『万葉』54号所収)等参照。

2 最近の諸注釈書は、概ね仮託説をとっている(新潮日本古典集成、小学館日本古典文学全集、中西進『万葉集全訳注原文付』講談社文庫等)。西宮一民『萬葉集全注巻第三』では次のように述べられている。

歌の場合、自敬表現と見るならば、作者が大津皇子であってもおかしくない。代匠記が「歌ト云ヒ、詩ト云ヒ、声ヲ吞テ涙ヲ掩フニ違ナシ」と述べたのは、作者を大津皇子と信じてのことであった。こういう草受のしかたが不自然ではないほどに、作者になり切った仮託がなされ、作品もまた作者の天分と呼応するが如くよく出来ていると言いうべきである。

3 自作挽歌としてはっきりしているものは、他に「有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌」(二一四一〜二二〇)、「柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に臨む時に、自ら傷みて作る歌」(二二二三)、「夫君に恋ふる歌」(二六一三〜二六二三)の六首しかない。あるいは「山上臣憶良、沈痾りし時の歌」(六一九七八)の一首も入れるべきかもしれない。

4 「日本書紀」の引用には、岩波日本古典文学大系本を用いた。以下の引用

も同じである。

5 西郷信綱『萬葉私記』（第一部初期萬葉十三天來皇女と大津皇子）、前出神堀忍「大伯皇女と大津皇子」において、倭建命が危機に臨んで伊勢齋宮であった伯母倭姫命を訪ねていることと、大津が姉大伯を訪ねたこととの類似について論じられている。両氏はともにそれぞれの行為を、沖繩の「をなり神信仰」言わゆるヒメ・ヒコ制において促えられ、大津は大伯のもとに行き、謀反の計画成就を願ったと述べておられる。私は後にも述べるように、大津は実際には謀反を起こす気などなかったと考えている。この時既に死を決意していたと考えるので、この大伯訪問は、単に姉に別れを告げに行ったものと解している。

6 吉田義孝「大津皇子論―天武朝の政争とクーデタに関連して―」（『文学』昭47・9）。

7 「懐風藻」の引用には、岩波日本古典文学大系本を用いた。以下も同じである。

8 本位田重美「高市皇子試論」（『古代和歌論考』一七頁）。

9 大系本「日本書紀」補注29―17（四四六頁）に「それまで天皇自身のもとで行われていた小規模な宮廷の事業にかわる、大規模な国家的な修史事業の開始であり、書紀成立の出発点をなすものと解するのが妥当であろう。」とある。

10 大津にとって麻呂は曾祖父にあたる。麻呂の子蘇我造媛（遠智娘ともいう）は皇太子妃であって、大田皇女を生んでいる。これが大津の母である。ところでこの謀反事件の直後、造媛が大いに嘆いて遂に死に至ったこと、さらに皇太子中大兄がそのことを痛み悲しんだことが「書紀」に記されている。大津は幼くして母を亡くしているし、母もまた幼い間に造媛を失っているのので、この事件のことが大田から伝わったとは思えない。大津が天智帝にかわいがられていたことを思うと、むしろ天智自身から聞かされることがあったのではないだろうか。

付記

本稿の内容は、一九八九年度神戸女学院大学卒業の岡崎友子さんが卒業論文のテーマに大津皇子をとりあげた時、その指導を行ってゆく中で考え始めたものである。氏の論文とは方法も目指すところも違うが、同じ辞世歌をとり扱っている

ことでもあり、考え方の上で若干重なるところも出てきた。承諾を得た上でのことではあるが、本文中で一々ことわることもしなかったもので、ここに記しておくことにする。なお、今回本稿を成すにあたり、改めて同氏からいくつか貴重な意見をいただいた。記して感謝の微意を表する次第である。

（原稿受理一九九〇年九月十四日）